

第8回： 次世代へ残す水環境のために

開催日： 1999年8月31日 / 会場： 「きゅりあん・小ホール」

開催趣旨： 20世紀も残り少なくなった現在、周囲の水環境をみると、安全でおいしい飲み水が容易には手に入らなくなっているだけでなく、ダイオキシン、環境ホルモンと次々に不安な物質の存在が明らかとなり、人々の生活を脅かすようになってきています。また、対症療法的な対策だけでは解決とならない課題も多くでてきました。私たちは過去からの歴史を振り返りながら、現在の生活の様式や習慣を見直していくことが必要となっています。次の世代へ残す水環境のために私たちは今何をしなければならないのか、事例に基づきながら基本的な考え方を知るためのセミナーを企画しました。

講演タイトル（講師／所属（当時））：

○ 飲み水の安全性 — 歴史と展望（眞柄泰基／北大院・工）

社会を支える水である水道水の歴史と展望を、主に公衆衛生、安全性、水質の視点から解説する。1957年の水道法制定、これに基づいて定められた水道水質基準、その1994年の改正の考え方を述べるとともに、水道水の重要性について論ずる。

○ 化学物質と環境 — リスクという考え方（浦野紘平／横国大・工）

化学物質のリスクという考え方を説明し、そのリスクの管理のためには、情報公開とリスクコミュニケーションが重要であることを述べる。多数ある化学物質やその毒性についての基礎的な説明、またPRTR制度についても解説する。

○ 生態系の保全 — 化学物質による生態影響（若林明子／東京都環科研）

我が国の化学物質の基準に、生態系を守り育てるという視点を取り入れていく必要がある。化学物質の水生生物への影響を評価する事柄について、具体的なデータに基づいて紹介する。

○ 環境毒性 — 評価と削減（松井三郎／京大院・環境質制御研究セ）

ダイオキシン類、女性ホルモン活性物質、発ガン物質などについて、その人体影響を一細胞（塩基）あたりのヒット数という見方で整理した結果を述べる。また、微量有害化学物質についての水質基準設定の考え方を議論する。

○ 手賀沼浄化への取り組み — 技術、市民、そして環境の心（小林節子／千葉県水保研）

手賀沼の水質汚濁の背景、歴史、現状、改善のための取り組み、また、行政と市民とのパートナーシップについて述べる。水環境に限らず、環境問題の解決のためには、技術・制度・価値観の三要素の必要性について論ずる。